

IV-46

田辺家史料による土木アーカイブス構築の基礎的研究

北海道大学大学院工学研究科 学生員 原口征人
 北海道教育大学旭川校 正会員 今 尚之
 北海道大学大学院工学研究科 学生員 内田賢悦
 北海道大学大学院工学研究科 フェロー 佐藤馨一

1. はじめに

土木史研究には資料の存在が不可欠といえる。しかし、今までの土木界では事業過程に生成されるさまざまな資料を保存するというに、注意を払ってこなかったといえる。土木の資料をいかに保存するかを考えると、図書館や博物館とは異なるアーカイブス（文書館）が着目される。

2. アーカイブスの概念

アーカイブス（Archives、文書館）とは

「特定の組織や個人がその活動の過程で作成したり取得したりした文書その他種々の記録を、それらが現用価値を失ったのちも、歴史的文化的遺産あるいは行政・経営上の参考資料、諸権利の裏付けとして保存し、それらを整理して平等利用に供する機関」

である。北海道の代表的な文書館には北海道立文書館（道庁赤レンガ内）があり、北海道庁で作成された文書を中心としたアーカイブスとして整備されている。

文書館の図書館や博物館との違いを表1にまとめる。その特徴は対象が「特定の個人・団体が活動に用いた記録文書群」にあり、それらを一括保存し利用するシステムである点である。

アーカイブスでは、資料が保存され登録されていればその保管場所、保管形態は問題ではない。重要なことは、文書間の関連性を崩さず保存し、利用の

表1 図書館・文書館・博物館の違い

	図書館	文書館	博物館
対象物	図書・雑誌などの大量出版物	機関・団体・個人が作成・取得した記録文書群	非記録情報のうちに生活情報
目的	保存・貸出	一括保存・利用	保存・展示

ための検索にたえうるかである。そのため現在発達の著しいパソコンデータベースの活用を考える。

3. 田辺家史料

(1) 田辺朔郎の略歴と業績

明治の第1世代の技術者として重要な位置を占める田辺朔郎は、1861年(文久元)に幕臣の子として江戸に生まれた。1877年(明10)16歳で工部大学校に入学、1883年(明16)に卒業後、直ちに京都府に奉職して琵琶湖疏水事業の設計施工を担当した。これを完成させたのちには、帝国大学工科大学教授となっている。1896年(明29)、義父の北垣国道に要請されて北海道庁鉄道敷設部長へ就任する。北海道では道東、道北地域の鉄道路線計画をたて、日高山脈を貫く狩勝トンネルルートを決定した。1900年(明33)に京都帝国大学理工科大学教授となり、1916年(大5)に工科大学長を経て、1923年(大12)に定年退官した。「大学教授はやめても学者はやめない」の言葉のとおり、その後も多数の事業・学術研究に関わり続け、1929年(昭4)には第17代土木学会会長になり、1944年(昭19)に82歳の生涯を閉じた。

田辺博士の関わった事業を次ページの表2にまとめる。関連する事業は琵琶湖疏水事業を皮切りに北海道を始めとする鉄道事業、各地の水力事業、トンネル、都市計画、震災予防などおよそ土木の関係するあらゆる分野にわたっている。しかもどれもが本邦最初といえる土木工事であり、それぞれが緻密な調査設計から不屈の努力により大事業が成し遂げられている。また現在、土木史研究をするものにとって欠くことのできない文献「明治工業史」「明治以前日本土木史」を編纂した業績も忘れてはならない。

A Fundamental Study of Civil Engineering Archives by TANABE Collection
 by Masato HARAGUCHI, Naoyuki KON, Ken-etsu Uchida and Keiichi SATOH

(2) 田辺家史料

田辺家（京都市左京区）には、博士が仕事に用いた文献・資料、書類が多数残されている。今日までこれだけ多量の史料が残されてきた背景には

- ・博士自身が仕事を秩序立てて体系的にこなすタイプであり、資料をまとめ保管する能力に長けていたこと。
- ・田辺家には博士が設計した蔵があったこと。
- ・博士がこの蔵の1階を書斎にしている、亡くなった後も資料がそのままにされていたこと。
- ・田辺家が現在まで引越しをしていないこと。
- ・田辺家では博士の活動の社会的重要性をかんがみ史料を大事に扱ってきたこと。

などの理由がある。

田辺家の蔵は昭和初期の鉄筋コンクリート製であり博士自らの設計であることに加え、この用式の構造物としても初期の部類に属する希少価値の高いものでもある。

表2 田辺朔郎博士の業績

分類	事業内容	関係した期間	田辺博士の功績
琵琶湖疏水	琵琶湖疏水工事	1881~1890	学生時代の卒業論文とし、そのまま工事監督となる
	水力発電	1888~1890	米国アスペンの水力発電視察から当時最先端の水力発電を実現
	京都鴨川運河の調査設計	1890~1894	琵琶湖から大阪までの水運を確立する
鉄道事業	京都市三大事業	1902~1912	第二疏水による水利（発電）、水道、電気鉄道（日本初）の各事業
	北海道鉄道ルート選定と建設	1896~1899	現在の鉄道網の基礎をつくる
	シベリア鉄道調査	1900	全盛期の工事を視察。陸軍の囂託であった
	鉄道に関する各種試験	1900~1910	橋梁、軌道などの撓度振動実験など
トンネル	広軌幹線鉄道（弾丸列車）計画	1939~1941	調査のみ。戦争激化により調査中止
	関門鉄道トンネル調査	1911~1942	計画の初期、ルートの選定から関わり終始工事に関わり続けた
土木史	大阪市地下鉄工事	1930~1936	
	日本工学会編「明治工業史」の編纂	1917~1931	編集委員長。途中震災で原稿を焼くなど苦勞の末、全10巻を完成する
	土木学会編「明治以前日本土木史」の編纂	1932~1936	編集委員長

4. 田辺家史料の経緯

(1) 京都大学天野研究室調査

田辺家史料のこれまでの経緯を図1にまとめる。ここに示すように、史料には今まで2度の調査がなされている。京都大学天野光三教授による昭和56年の調査と、京都市水道局による平成元年の調査がそれである。

天野調査では、貴重な文献の存在が確認されていたにもかかわらず、その全容について明らかでなかった田辺家史料に対し、資料を分類し目録化する作業が行われた。これによって、各資料1点ごとの整理番号が付加され、目録カードが作成された。田辺博士自身が資料を事業ごとにまとめたかたちでそのまま残していたため、それをそのまま分類単位として用いて整理番号をつけている。最終的には1400点あまりに資料が分類され登録されている。

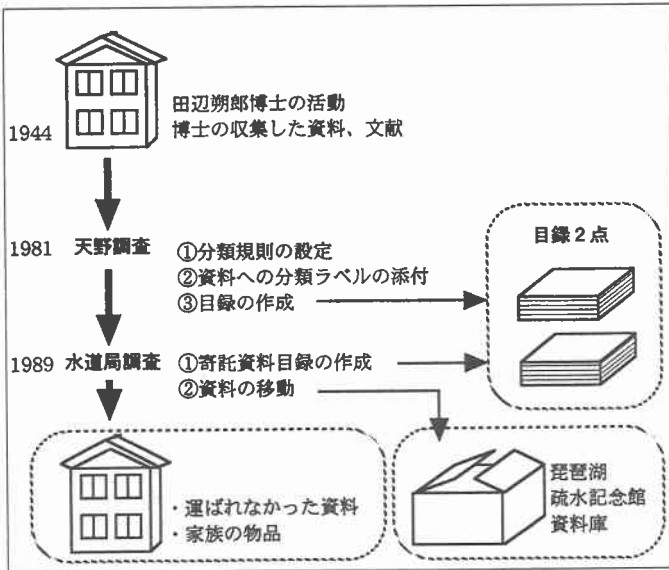


図1 田辺家資料の現在までの経緯

(2) 京都市水道局調査

水道局調査では、「琵琶湖疏水記念館」の建設（平成元年8月開館）にともない資料を展示するため、主だった資料が段ボールにつめられ、記念館に移された。資料の取扱は田辺家が疏水記念館に寄託したものとなっている。移動した資料に対しては目録が作成されている。記念館では、疏水事業にかかわるものを展示として利用し、その他の大部分の資料は資料庫に保管されたままとなっている。

5. 田辺家史料のアーカイブス化

(1) 田辺家史料アーカイブス作成の方針

田辺家史料アーカイブスの特徴としては以下のことがあげられる。

- ①個人アーカイブスであること
- ②非現用の歴史史料が対象とされ、後から追加される資料は少ない
- ③所蔵品の調査が過去に行われていて資料目録が作成されている

この特徴を考慮してアーカイブス作成を行った。

アーカイブス作成には表3の原則を尊重しなくて

表3 アーカイブス作成の原則

出所の原則	資料を作成したそれを保管してきた組織・機関、個人を「出所」として、一つの文書群の範囲を確定し、他の出所の文書とは決して混合してはならないという原則
原秩序尊重の法則	出所における文書の作成、保管されてきた状態を尊重するという原則である。その配列をみだりに崩してはならないということは、個々の文書の配列が、その個人、機関の活動の反映を残していることが多いからである
原形保存の原則	個々の文書の原形を尊重して保存するという。この場合原形とは文書が伝来してくる間に与えられた最後の形状と考えられる。
平等取扱の原則	すべてのアーカイブス（文書館資料）に同等の価値を認めて、平等に取り扱うという原則

はならない。「出所の原則」では、田辺朔郎が出所になる。この点、家族に関連する部分は注意を払う必要があり、博士が存命中の資料がそれ以後収集された資料かで明確な線引きがなされる。特に博士の私生活に関わる資料は注意して分類する必要がある。「原秩序保存の法則」では、天野調査での目録作成時、博士が仕事をしていた棚の状態で事業ごとに分類作業を行っている。このため、文書の作成、保管の状態が尊重された分類がなされたと考える。天野調査・水道局調査を尊重し、その分類方法を踏襲したアーカイブスの構築が求められる。

今後、田辺家史料の利用がどのようなかたちでなされるにしても、完全な目録を作成して資料の全貌を把握することは、まず必要とされる事項となる。この方針により資料全部を目録化し、検索の便をはかるため、目録をコンピュータデータベース化することとした。

(2) 田辺アーカイブス作成プロセス

図3に田辺家資料アーカイブスの作成プロセスを示す。

①資料目録の確認

目録が2点あるため、その内容を検討した。その結果、分類方法などはまったく同一で、天野目録は水道局目録に完全に包含されていることが判明した。

②京都市琵琶湖疏水記念館による目録のコンピュータデータベース化

琵琶湖疏水記念館による目録を電子情報化することとした。目録件数の増加分は資料を細分化して登録し直した結果のものであった。



図2 田辺家の蔵（原口撮影）

③現在田辺家に保管している資料の目録化

現在蔵にある資料（疏水記念館に搬出されなかった、水道局目録に登録されていないもの）を目録化する。この資料には博士の人事記録や書簡、晩年の随筆、趣味の日本画・書・手彫りの調度品など、博士の私生活を語る貴重な資料が存在している。また、鉄道線路の振動・たわみの実験データや装置、工事記録の写真や、博士自身が未整理のままとした資料や著作の直筆原稿などの土木史的価値の非常に高い資料も認められる。作業の詳細は次節に述べる。作成された目録はさらにパソコンD.B.化する。

④田辺博士資料目録の作成

2つのパソコンD.B.を統合し、二重登録等の誤入力を排除して、書式を調整して田辺博士資料目録D.B.を作成する。

⑤アーカイブス活用の検討

目録D.B.の利用に関する規定（ルール）の検討や、資料の保存場所や保存方法、資料利用の規定に関する検討など。

(3) 田辺家蔵調査 (H9.12.8~17)

田辺家蔵の残存資料の目録作成と整理、蔵内の保管秩序の確保を目的として作業を行った。蔵内ではワークシートによって資料内容を書き留め、資料を

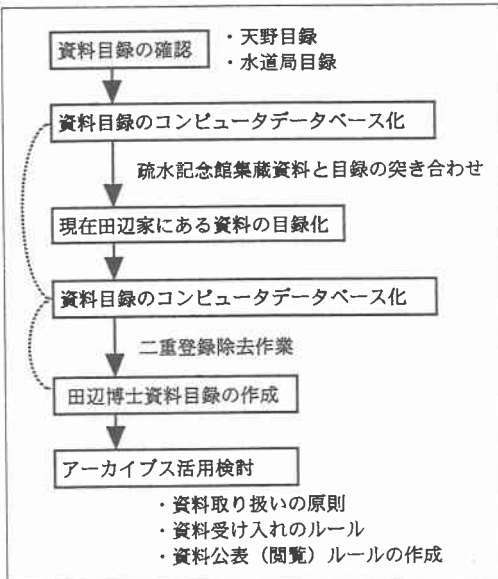


図3 田辺家史料アーカイブス作成プロセス

袋に入れて段ボール箱に収めて整理する。のちほど持ち帰ったワークシートにより、コンピュータデータベース登録作業を行うこととした。

資料の保管場所は蔵の2階とし、場所を区切って博士の資料を置く場所と家族の物品を置く場所を明確に分離した。整理番号は天野調査を踏襲して、用いる記号も同じものを使い、のちにデータベース上で統合して、田辺博士資料全目録を作成できるように配慮した（図4）。

作業人員は3名ないし4名、または2名で行い6日間の作業日で終了した。約700件の資料が新しく登録されたことになる。

6. おわりに

このような土木資料の保存はまだまだ事例として少なく、この田辺家史料についても資料公開、閲覧の場所等の問題が残されており、今後の対応が求められている。

最後に、田辺博士三男多聞氏夫人、田辺美佐子氏に対しては調査へのご協力ご尽力への感謝と、資料に対しては調査へのご協力ご尽力への感謝と、資料を現在まで多大な注意を払って残してこられたことに敬意を表します。また、京都大学小林研究室の田中君、森君には調査作業を共にやり遂げた喜びと感謝を表わします。今研究室の学生にもデータの打ち込みなどの作業に対して御礼申し上げます。

【参考文献】

- (1) 土木学会「近代土木技術の黎明期—日本土木史研究委員会シンポジウム記録集—」1982.6.25
- (2) 土木学会「新体系土木工学 別巻 日本土木史」技報堂出版, 1994.7.10
- (3) 京都大学工学部土木工学教室創立六十年記念事業会「京都大学工学部土木工学教室六十年史」1957.6.18
- (4) 山県英彦「土木学術資料の保存と検索に関する基礎的研究」北海道大学交通計画学研究室, 1995.3

1. 内容	2. 品目	3. 年代
A. 琵琶湖疏水事業	1. 器具類	田辺博士の
B. その他京都市の事業	2. 図面, 掛軸, 写真	職歴から、
C. 京都市以外の事業	3. 日記, ノート, 書簡等の肉筆書類	7つの時代に区切り、
D. 学術研究	4. 図書等の刊行物	没後と時代に
E. 公的生活	および書類	不明とあ
F. 私的生活	5. 新聞雑誌およびそのスクラップ	わせ11期間に分ける
G. その他	6. その他	

図4 資料分類記号